

NEWSLETTER

No. 14

岐阜大学国際交流室 1992年4月10日

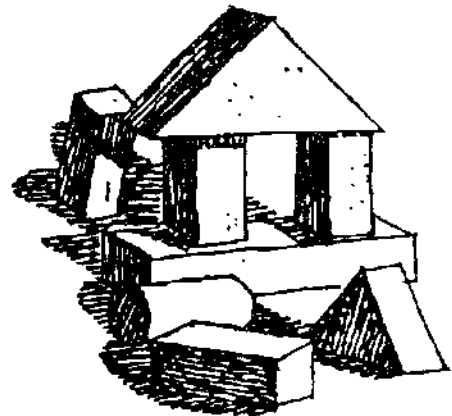
努力の成果を発表！

去る2月19日（水）に“日本語スピーチテスト”が行われた。これは、国際交流室で日本語クラスを受講している留学生がそれぞれの勉強の成果を発表する一種のテストである。初級・中級と、今年度は特別に上級クラスが開講されたこともあって、クラス別に時間を区切り、受講者全員を対象にして行われた。

クラス別に見てみると、初級クラスから12人、中級クラスから6人、上級クラスから12人、また医学部のクラスからも今回は3人の留学生が出席した。初級クラスの学生については、まだ語い数も限られているため、授業で習った文法を基にした身近なトピックが多かった。中、上級クラスになると、“日本語を話している年季”が違いためか、次から次へと飛び出してくる言葉が本人ととてもマッチしていて自然に聞こえた。

今年のスピーチテストでは、トピックの選択を全て学生にまかせたので、その幅はお互いの文化の違いから、宗教についてや自己紹介風のものまで、また日常生活の中で思ったことなど、実に様々であった。中には言葉だけでは物足りず、ジェスチャーを交えたり、黒板を使って図解したり、突然「水ぎょうざ」の作り方を説明し始めたりする人もいた。そして、各スピーチの後に質疑応答の時間がもうけられ、留学生とインストラクターが一緒になって討論することができた。時々、スピーチの内容からずっとかけ離れた質問をして大きく脱線したりもした。

今回は、午前、午後合わせて、約4時間にわたって行われたが、そのほんの一部をここで紹介したいと思う。



「断食」について

アスマ・ハマド（イラク）



今日は、断食について話します。来月6日（3月6日）からラマダン月が始まります。この月はモスリムたちは断食します。この期間中、日の出の1時間30分前から日が沈むまで、何も食べませんし、何も飲みません。そしてタバコも吸いません。断食をすることは、モスリムたちに多くの利益をもたらします。一番は、それが健康に良いこと、二番は欲望のコントロールのよい訓練になること。三番は、豊かな人々は貧乏な人々の苦しみを感じることで。断食をすることは、全てのモスリムたちの義務です。病気でできない人々は、貧乏な人たちにお金をあげます。このラマダン月が終われば、世界中のモスリムたちはごちそうを作って祝います。

※モスリム＝イスラム教徒

「タバコを吸いたいですか。」

ピタック・レクラ（タイ）教育学部



私の専門は体育です。日本は便利な国ですから、何でも便利です。例えば、自動販売機がたくさんあります。食べ物と飲み物とタバコの自動販売機は、ほんとうにたくさんあります。使うのは簡単だし便利なので、タバコを吸う人がどんどん増えてきました。日本人はたくさんの方がタバコを吸います。女の人も男の人も吸っている人をたくさん見ました。そして、どこでも吸います。デパートやレストランでも吸います。でも、タバコを吸うことはよくありません。タバコを吸う人の肺と心臓はよくありません。健康もよくないと思います。運動をすることは、もちろんいいことです。よくスポーツをすることは、“元気”になるということです。力も肉体も“元気”になります。タバコを吸うのと、スポーツをするのと、どちらがいいと思いますか。私はスポーツをする方がずっといいと思います。皆さん、これからスポーツをしましょうか。

「日本語のあいさつ」

胡 玉霞 (中国)



日本に来てから、3ヶ月がたちました。今まで、国際交流室で日本語を勉強してきて、日本語がたいへんむずかしいと感じました。とくに、日本語のあいさつが複雑なので覚えにくいです。日本に来た時、日本人の家族と一緒に暮してから、毎日あいさつをしなければなりません。日本人は、御飯を食べる前に、「いただきます」と言います。食べ終わった時に、「ごちそうさまでした。」と言います。朝、人と会った時には、「おはようございます。」と言います。寝る前には、「おやすみなさい。」と言います。家を出る前に「いってきます」と言って、「いってらっしゃい」と応えます。家に帰った時は「ただいま」と言って、「おかえりなさい」と応えます。この他にも、もっとたくさんあいさつの言葉があるので、私は頭が痛くなってしまいます。(中略)

ある日、大家さんの家族と一緒に晩御飯を食べている時のことです。皆はいろいろな話をしていました。私は、一番早く食べ終わったので、はしをテーブルの上に置いて「どういたしまして」と言いました。皆は急に静かになりました。その後で皆は笑いました。私はとってもはずかしかったです。それでその時から、一生懸命日本語の勉強をしています。今は簡単な日本語がわかるようになり、間違ったあいさつも減ってきました。それで、大変日本語がおもしろくなってきました。もっと日本語が話せるようにがんばりたいと思います。

マイクル・スリフカ (アメリカ) 工学部



— 日本の便所とアメリカの便所はずっと違います。タオルがないのは不便です。私の手がぬれる前に、タオルがないのを思い出しません。いつも、パンツで手をふくのは、好きじゃありません。私のアドバイザーは、ハンカチを持つことをすすめてくれましたが、まだ実行していません。(中略) もしあなたが、私のパンツがぬれているのを見たら、私がまだ日本の文化に慣れていないのに気づくでしょう。—

夏 冬生 (中国) 教育学部



— 世界は小さいものです。例えば、この前アメリカとイラクは戦争をしていました。こわかったです。でも今、アスマさん(イラク)と、デイヴさん、マイクルさん(アメリカ)は、よく相談し合ういい友達だと思います。—

「国際交流室 ホームステイ担当」

教育学部 佐藤節子

私が岐阜大学国際交流室室員になったのは、1990年4月である。そしてすぐの仕事が、協定を結んでいるスウェーデンのルンド大学から8週間のサマースクールにやってくる5人の学生のためのホストファミリー探しであった。この仕事は、割合容易に進んだ。前年この役目を受け持たれた前国際交流委員会委員長の鈴木正敏先生が、すでに先鞭をつけておかれたのと、学外、学内からすぐに、協力の声を頂けたからである。

1991年度、サマースクールのホームステイは、その方向をやや変更した。8週間のホームステイから、1週間と数回の週末のホームステイという方向にである。

ルンド大学からくる学生のほとんどは、23,4歳以上である。彼等は本国では、すでに親とは独立して生活をしている。そんな彼等が、8週間という期間、日本の家庭で過ごすには、ホストファミリーと留学生双方の忍耐と理解が多大なものであり、むしろ寮生活のほうがよいのではないかという判断に基づいての変更であった。このことは、留学生自身には好都合であった。午前中の日本語の授業で出されたたくさんの宿題を、みんなで一緒にやることができるし、自分たちの生活のペースを、本国でのものとあまり変えないで済むということもあったからである。しかし、彼等の日本語の上達には、あまり望ましいことではなかったらしい。いつも彼等だけで固まって、普段の生活をスウェーデン語で済ましてしまうということに、問題があったようだ。

この年、これと同時に、一般の留学生に、週末などのホームステイへの希望を募ることも開始した。

ホームステイとは何であろう。お互いに、何が得られるのだろうか。あるいは、双方何が与えられるだろうか。私が一般の留学生のホストファミリーに望むのは、遠く故郷を離れている人達の週末だけの里親あるいは兄弟、親類になって頂けないかということである。たまに訪ねることのできる知り合いがいるということだけで、実際訪ねる、訪ねないに拘わらず、どんなにか心強いことであろう。また留学生に望むことは、大学という一面的な社会の他に、もっと日常的な生活の臭いのする日本人社会と日本人にも触れて帰ってほしいということである。どちらも、留学生にとって何かしら得ることであろう。ではホストファミリーにとってはどうか。こんなことを言ったら留学生の人達に叱られそうだが、ホストファミリーにとっては、何か得たと感じるのには難しいかもしれない。なぜなら、ホストファミリーには最初に登録しておいてもらって、留学生からホームステイの希望があった時に留学生を紹介するという方法をとっているからだ。何かをしてあげたいと熱い心で登録されたホストファミリーには、その熱い心が冷めてしまうほど長いこと待っていただかねば

ならないこともある。また、一度ホームステイに来た留学生にたびたび訪ねてほしいと思っても、留学生のほうがなかなか忙しくてそうそう訪ねることができず、期待に添えないということもある。常にホストファミリーの熱い心が、空回りさせられるかもしれないのだ。また、両者にとって、与えたい、得たいと思っているものが違って、食い違ってしまうこともある。これらのことは日本の実の親子関係に似ているかもしれない。子供は、親が思うほどに親の期待に答えず、独自に歩んでしまう。そして自分の都合の良い時に急に来て、好きなことをして、御飯をたらふく食べて、自分のアパートに帰って行ってしまふ。これは私自身を振り返っての話である。何とも親とは割のあわない身上である。その割のあわない役目を、私はホストファミリーにお願いしているのだろう。しかし子供は自分が親不孝をしていることを重々承知している。また自分がこれまで何気なくもってきた人との関係において、その時には気付かなかったことを、十数年後に、ああそうだったかと気付かされることもある。その時にはもうその相手に返すことができなくなっている感謝を、私たちは次の世代に向けていくのだろう。そしてその次の世代はそのことに気付かずに、あたりまえのことと受け取って、時を経た後に気付いて、次の次の世代に向けていく。そんな繰り返して、親とはいつも損な役目なのであろうと私は思う。ホストファミリーの方々には、そのような損な役回りであることをご承知おき下さればと思う。そしてご承知の上で尚、お力をお貸し下さるようお願いしたい。しかし、だからといって、留学生というこれからの世代を甘やかせと言っているのでは毛頭なく、叱って憎まれるという役目もお願いする次第である。

一度のホームステイからお互いに気が合って、長いお付き合いとなるなら幸いである。あるいは、お互いの考え方の違いから、気が合わないこともあろう。そんな時、すぐに理解し合えというほうが無理である。いつの日か、こうだったのかと自分なりに理解できるまで、その関係は胸にしまっておいてもらい、他の留学生やホストファミリーの方々との交友を広げていてもらいたい。もう有限でしかなくなったこの地球の上で、お互いが知り合い、理解し合い、考え方の違いを尊重し合っていくことが大事なんだと思いつつ、1992年3月、国際交流室ホームステイ担当の仕事を終える。

時 間 割 1992年度 前期 (平成4年4月13日～平成4年9月)

	月	火	水	木	金	
9:10	1	初級クラス1 (加藤)	初級クラス3 (中島)	初級クラス5 (及川)	初級クラス6 (河地)	初級クラス8 (中島)
10:40		中級クラス① (河地)	中級クラス③ (後藤)			中級クラス⑤ (加藤)
10:50	2	初級クラス2 (及川)	初級クラス4 (後藤)		初級クラス7 (中島)	初級クラス9 (加藤)
12:20		中級クラス② (加藤)			中級クラス④ (河地)	中級クラス⑥ (後藤)
13:30					☆英会話クラス (12:30～13:30)	
15:00	3	医学部初級1 中島 (13:00～14:30)			医学部初級2 後藤 (13:00～14:30)	
15:10		医学部中級1 及川 (14:40～16:10)			医学部中級2 及川 (14:40～16:10)	
16:40						

在学中、または来日予定の留学生、及び研究者の中で日本語クラスの受講を希望している方、あるいは希望すると思われる留学生、及び研究者を担当の先生方、できるだけ早い時期に国際交流室まで御連絡ください。
(尚、前期オリエンテーションは4月10日(金)です。)

岐阜大学国際交流室員名簿 任期 3.4.1～5.3.31 *4.4.1～6.3.31

所 属	職 名	氏 名	備 考
農 学 部	教 授	* 堀内 孝次	国際交流室長
教育学部	助教授	朝田 健	ホームステイ担当主任
"	助教授	* 廣田 則夫	日本語日本文化教育担当
医学部	助 手	神原健治郎	医学部関係担当主任
"	講 師	* 加藤直樹	医学部 関係
工 学 部	講 師	坂本 秀生	日本事情担当主任
"	助 手	* 中谷 剛	学 生 担 当
農 学 部	教 授	加藤 宏治	国際理解教育担当主任
"	助教授	* 鈴木文昭	会 計 担 当
教養部	助教授	丸山 清史	広報担当主任
"	教 授	* 中須賀徳行	サマースクール・渉外担当
工 短 部	助教授	藤田 一郎	短期留学宿舍担当主任
"	助教授	* 松浦晃次	エクスカージョン担当

—今回任期満了で交代された先生方—

- ◆藤井 洋 室長 (工学部)
- ◆佐藤節子 ホームステイ担当 (教育学部)
- ◆江崎孝行 日本語教育 (医学部) 担当 (医学部)
- ◆宮田幹二 会計担当 (工学部)
- ◆松尾誠之 サマースクール担当 (教養部)

大変、お疲れ様でした。室員という形ではありませんが、今後ともよろしく御指導ください!

